

Title	日本〈小国〉意識の防衛機制
Sub Title	Concept of big China in Japanese thought
Author	前坊, 洋
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	1982
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.75, No.3 (1982. 6) ,p.415(187)- 427(199)
JaLC DOI	10.14991/001.19820601-0187
Abstract	
Notes	島崎隆夫教授退任記念特集号
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19820601-0187

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

日本〈小国〉意識の防衛機制

前 坊 洋

もろこしはもとよりも、孝ある国と聞きつるに、か程のけうし有りけるよと、日本人も瑞喜せり。——下掛り「唐船」
もろこしは心なき、えびすの国と聞きつるに、か程のけうし有りけるよと、日本人も瑞喜せり。——上掛り「唐船」

ともあれ、「日出ざる処の天子」(隋書、倭国伝⁽¹⁾)の国書に対する煬帝の返書を百済においてうばわれたと、小野妹子は奏上した。流刑の決定にもかかわらず、天皇はこれをゆるした。ともに来朝した隋の使臣への配慮ゆえであった。すなわち、「其の大国の客等聞かむこと、亦不良し」⁽²⁾。

推古紀十六年六月条の上の箇所は中国を〈大国〉とあらわすが、『書紀』には、また、日本を〈大国〉とあらわすばあいもある。欽明紀十五年十二月条には、百済の王子が、新羅遠征に反対する重臣に対して、「我大国に事へまつる、何の懼るることか有らむ」⁽³⁾と主張し、斎明紀六年七月条には、帰国を希望する「靺鞨羅人」⁽⁴⁾が、「願はくは後に大国に朝らむ。所以に、妻を留めて表とす」⁽⁴⁾と奏請した。

『隋書』倭国伝の用法をも参照するならば、〈大国〉が、「朝事」せられる側を指示する、いわば、術語であることはあきらかである。ここに、中華帝国の世界秩序内において日本のしめるべき位置が発明せられた。

「夷」に対して〈大国〉でありたいとのぞむほどに、「華」に対する〈小国〉意識が存在の底をつよく拘束する。中心と周辺との関係が階統秩序を構成し、しかも、〈大小〉関係として表象せられたところから、以後の日本思想史は、政治学的であるよりもむしろ文明論になじむ一箇の主題を獲得するのである。

註(1) 岩波文庫、74頁。以下、引用は活字本からおこなう。その際、あきらかなあやまりはただし、用字は通行の字体にあらためる。また、漢文はよみくだすことがあり、振仮名は削除することがある。

(2) 『日本書紀』、日本古典文学大系、第68巻、190頁。

(3) 日本古典文学大系、第68巻、111頁。

(4) 日本古典文学大系、第68巻、344頁。「靺鞨羅」は、補註に、「おそらく、今のタイ国、メコン河下流の王国、ドヴァラヴァッティ」とする。575頁。

(5) 「新羅・百済、皆倭を以て大国にして珍物多しと為し、並びに之を敬仰し、恒に通使・往来す」。また、推古天皇の裴世清への言葉として、「冀くは大国惟新の化を聞かんことを」。岩波文庫、73、76頁。

(6) 『書紀』には、「大日本国」も一例、百済王の諸将への発言中にみられる。日本古典文学大系、第68巻、358頁。

以下、日本<小国>⁽⁷⁾意識の防衛機制に関し、若干の類型化をこころみつつ、ほぼ通時的な概観をおこないたい。

空想への逃避がもっとも原初的な形態であろう。<大小>関係からの逃避には二方式がありうる。関係からの逃避と、<大>もしくは<小>からの逃避とである。

まず、関係からの逃避は、関係性の排除、すなわち、同一化によって達成せられる。中国をとりこむことにより、自我は空想的に拡大するのである。

その際、日中が「妙契」(山崎闇齋)⁽⁸⁾することを事実の一々に即して立証することは不可能であるゆえ、同一化は象徴的になされざるをえぬ。

象徴としてもっとも有効なものは、「転生」と「渡来」とを許容せられる、個性である。それは、歴史的主体として、みずから、いわば、同一化を遂行する。

しかしながら、客観的には、個性も、また、「転生」・「渡来」の前後においては、まったく別箇の相貌を呈するゆえ、「名はかはり、心は一」(藤原惺窩)⁽⁹⁾とせられねばならぬほかの象徴のばあいと同様、それらが同一であることについての神話が要請せられる。

たとえば、「南岳大士、後身にして始めて到る」(空海)⁽¹⁰⁾、また、「今我が法華聖徳太子ハ是南岳慧思大師ノ後身也」(最澄)⁽¹¹⁾と信ぜられた太子ゆかりの寺を天皇にしたがっておとずれた淡海三船は、その詩につきのごとく序した。

隋代南岳衡山ニ思禪師有リ、常ニ願ヒテ言ハク、我歿後必ズ東国ニ生マレ仏道ヲ流伝セント。其後日本国ニ聖徳太子有リ生マレテ聡慧、時ニ小野臣妹子ヲ遣ハシテ隋天子ヲ聘フ、即チ太子妹子ニ教ヘテ曰ハク、其処ニ向ヒテ我が持チシ法華経并ビニ錫杖・鉢ヲ取り来タレト。妹子教ヲ奉ジ尋ネ訪ヒテ将来セリ。時人皆云ハク、太子ハ是思禪師之後身也ト。⁽¹²⁾

註(7)以下の二例が、当該意識の滲透を証拠だてる。『大鏡』に、相人が藤原仲平を相して、「あまり御心うろはしくすなほにて、へつらひかざりたる小国にはおほぬ御相なり」。「猫のさうし」に、夢中、「虎毛の猫」のいわく、「われは是天竺唐土に、恐をなす、虎の子孫なり。日本は小国なり、国に相応してこれを渡さるゝ」。ちなみに、昭和五十六年、軽井沢高輪美術館開館のマルセル・デュシャン展のために来日したフィラデルフィア美術館二十世紀美術部長が、「フィラデルフィア展のときはパリから作品を運ぶのに競走馬と一緒にでしたが、こんどは犬やヒヨコと一緒に。不思議なことです」とかたつたとつたえる新聞記事には、「國小さいのでヒヨコ?」と見出しがつけられた。日本古典文学大系、第21巻、279頁。同、38巻、301~302頁。『朝日新聞』昭和56年7月29日夕刊。なお、いわゆる文化接触を論ずる際、斯様な意識の問題を独立の範疇とすることが合理的である。

(8) 『垂加翁神説』(跡部良願)、日本の思想、第14巻、296頁。

(9) 『仮名性理』、日本の思想、第17巻、49頁。なお、同巻解説(西田太一郎)12頁に、惺窩が儒服をつけて家康に關したことへの言及がある。すなわち、慶長五年、象徴による同一化である。

(10) 『遍照發揮性靈集』、日本古典文学大系、第71巻、273頁。

(11) 「弘仁七年謁四天王寺聖徳太子廟詩」、『伝教大師全集』第5巻、473頁。『伝述一心戒文』、同第1巻、591頁。

(12) 「天皇巡一行諸寺-從-駕聖徳太子寺-一首」、『経国集』、日本古典全集、136頁。『伝述一心戒文』、『伝教大師全集』第1巻、549・592頁。辻善之助『日本仏教史之研究統編』(昭和6年、金港堂書籍)2~3頁を参照。なお、同種の説として泰伯渡来説があるが、『風姿花伝』には、欽明天皇の夢に、「我はこれ、大國秦始皇の再誕なり。日域に機縁ありて、今現在す」といったという、秦河勝の異常誕生説話がしるされている。日本古典文学大系、第65巻、369頁。

また、〈大〉もしくは〈小〉からの逃避は、〈小〉による価値実現、〈大〉の貶価、そして、〈小〉から〈大〉への成長の物語としてかたられる。「山椒」の矜持は、「独活」の否定をともしないつつも、なお、みずからを希望ある「双葉」として定位するのである。

神産巢日神の指から少名毘古那神のこぼれおちたとき、〈大小〉関係から逃避すべき空想の一端が用意せられた。⁽¹³⁾

その神は、桃太郎や瓜子姫と同様に、ガガイモの舟にのって出雲の波間にあらわれた「ちいさ子」である。かぐや姫・一寸法師・田螺息子・座敷ワラシ・アクト太郎・スネコタンバコ・団栗太郎・小泉小太郎・泉小次郎・五分次郎・一寸小太郎・豆助・豆蔵のごとき小童のもたらす福德は、もとより、〈大小〉関係に由来する困難の解決を目的として構想せられたものではないが、結果として、〈小〉への祝福による逃避の場をあたえた。⁽¹⁴⁾

「なりは小さいが」の立場は、より直接に、「小国ながら」の立場として、事実の世界における対照的価値の実現をめざす。

価値は、まず、客観的には、中国文明への近接によって、主観的には、凌駕すべき対象に帰属するそれにおける比較こそが凌駕のもっとも明瞭な方法であることによって、中国から抽出せられる。

絶句の作成能力（北野天神縁起）・兵書の学習能力（義経記）・「聖人の三徳」⁽¹⁶⁾の体現度（山鹿素行）等における日本優越の論証は、彼我「一々其のしるしを立て校量」⁽¹⁶⁾（山鹿素行）することによって価値の社会的布置を勘案し、「科学的」に、あるいは、「誠に菅家の御草には、心のをよぶ所にあらず。白氏の文集には、眼も及けり」⁽¹⁷⁾のごとき権威主義的断定、「八尺の壁を踏んで天に上りし」⁽¹⁸⁾（圈点引用者、以下同様）穆王に対するに「九尺の築地を一飛びの中に宙より飛び返り給ふ」⁽¹⁸⁾技をもってするがごとき修辭的計量、の造型する突出した個性によって象徴的におこなわれる。

象徴的方法の効果が「科学的」方法のそれにくらべて希薄であることはない。後者も、たとえば、「知仁勇」を指標とする点において、すでに、象徴的方法を採用しているのである。指標の選択は、通常、「聖人の道」のごとき価値体系の選択と、その「三徳」のごとき体系内の基幹価値の選択と

註(13) 佐藤信淵の膨脹の構想において、「少彦名ノ神」は、その権力中枢の「宗廟」にまつられる十五神のひとつである。『混同秘策』、日本思想大系、第45巻、441頁。

(14) 桃太郎を称揚推尚してやまなかつた巖谷小波が、「何も桃太郎の様に、何でも外国を征伐しろと冒険的思想を奨励したいのでわかない」というごとく、桃太郎は現実の膨脹の象徴としても有力である。たとえば、明治七年十一月末、北京における折衝をおえた大久保利通を歓迎する横浜の風景のうちに、「狐ケンの手踊り」が評判をとったが、その歌に、「敵は人喰ひ鬼が島退治帰帆は神の国支那はグズム日延で一戦シヨ」。『桃太郎主義教育新論』（昭和6年、賢文館）217頁。『朝野新聞』明治7年11月30日。なお、『朝野新聞』は縮刷版による。以下、新聞からの引用に際して、濁点・句読点をあらたに附することはしない。

(15) 異常誕生説話は、日本に固有のものではない。

(16) 『配所残筆』、日本の思想、第17巻、330頁。

(17) 日本思想大系、第20巻、152頁。

(18) 日本古典文学大系、第37巻、122頁。

の二段階の象徴過程を経由せねばならぬ。それゆえ、そこに「科学性」がもとめられるならば、たとえば、「小国なれども日本は男も女も義は捨てず」(国性爺合戦)⁽¹⁹⁾の「義」との指標としての優劣もあわせて論ぜられねばならぬこととなる。

むしろ、その過程よりも、考量の前提自体に問題は存する。「大国を窺はん」(謡曲、弦上)⁽²⁰⁾とするものが中国への同一化を拒否するかぎり、当該価値は「普遍性」を有することによって日本の均霑の余地を生ずることとなる。そして、その「普遍的価値」の根源が依然中国にもとめられるならば、中国は、その発明者としての地位において、凌駕せられがたい。

価値は、それゆえ、つぎに、中国以外の<大国>から抽出せられる。歴史的には、その<大国>の役割を、「上古末代、大国辺夷」(明恵)⁽²¹⁾の組みあわせにおいて、天竺が最初になることとなる。「辺地にむまれて末法にあふ」(道元)⁽²²⁾意識は相互に共鳴するゆえ、「濁世末代」感の昂進が、天竺<大国>説を支持する。

日本わかつては。小国なりとは申せとも。日域と名付つゝ。日をかたとれる国にて。三國一⁽²³⁾
(幸若舞、日本記)

此の国は月氏漢土に対すれば日本国に伊豆の大島を対せるがごとし。寺をかざりれば漢土月氏にも雲泥すぎたり。(日蓮)⁽²⁴⁾

大日如来の顕現・仏法の興隆のごときは、すなわち、天竺に由来する価値であり、それに依拠して、日本の「三國一」たる所以が主張せられる。

もとより、すでに、「一閻浮提八万の国の中に、大なる国は天竺、小なる国は日本也。名のためたきは印度第二、扶桑第一也」(日蓮)⁽²⁵⁾と結論づけんとするものにとって、天竺への同一化は、中国否定の方法としても回避せられねばならぬ。そして、「普遍的価値」の根源が天竺にもとめられるとき、中国のばあいと同様の隘路が生ずる。

たしかに、天竺に対しては心理的距離感も存する。渡竺をくわだてた栄西・明恵のごときは例外であり、しかも、かれらとて計画は挫折をみねばならなかった。その存在の、いわば、理念性が、<大国>の圧迫を緩和しよう。しかし、そうであるならば、それは、同時に、価値を天竺にもとめる方法の弱点とならねばならぬ。

価値は、したがって、おわりに、日本の内部から抽出せられる。

註(19) 日本古典文学大系、第50巻、262頁。

(20) 『謡曲全集』第6巻、341頁。

(21) 『柳屋明恵上人遺訓』、日本古典文学大系、第83巻、61頁。『平家物語』に平清盛が重盛を評した言葉、「是程国の恥をおもふ大臣、上古にもいまだきかず。まして末代にあるべし共覚えず。日本に相應せぬ大臣なれば、いかさまにも今度うせなんぞ」の「日本」も、「辺夷」の<小国>を含意する。日本古典文学大系、第32巻、244頁。

(22) 『正法眼蔵』、日本の思想、第2巻、255頁。

(23) 『幸若舞曲集』本文篇、18頁。

(24) 『神国玉御書』、『原文対照口語訳日蓮上人全集』第5巻、252～253頁。

(25) 「四条金吾殿御返事」(建治3年)、有明堂文庫『日蓮上人文集』、620頁。

日本〈小国〉意識の防衛機制

吾が国辺地粟散の界と雖も、神国たるに依て、総じては七千余座の神、殊には三十番神朝家を
守り奉り給ふ。(保元物語)⁽²⁶⁾

和国はつは物の国として。ちひさけれ共神のまもりつよく。人の心かしこかん也。(松浦宮物
語)⁽²⁷⁾

さすが我朝は辺地粟散の境と申ながら、天照大神の御子孫、国のあるじとして(平家物語)⁽²⁸⁾

〈小国〉・「辺地粟散」に逆接して、たとえば、「神国」の両契機、すなわち、「神明」の加護
・「神孫」の皇統が主張せられる。「神」と連繫する独自性の強調が優越性の認識に直接するゆえ、
たとえば、「伊勢・八幡ノ御苗裔ノミ日本国ノ王位ヲ受継給事、以_レ異朝_ノ武力_ヲ民上_ニテ帝ト成リ、
賢智ヲ賞シテ臣昇テ王タルニハ似ザリキ」(八幡愚童記)⁽²⁹⁾のごとく、支配における伝統主義と能力主
義との比較をふまえることは、かならずしも必要ではない。⁽³⁰⁾

眼目は「神国」性自体であり、それゆえ、その論証である。「異賊朝敵」(八幡愚童記)⁽²⁹⁾に対す
る赫々たる戦果が、歴史的にかたられねばならぬ。

一般に、一国に内在する価値探索の場は歴史であるとともに、その検証の場も同様である。そし
て、歴史を資料として価値を帰納することは、その資料の無限性によって不可能であるゆえ、価値
は、いわば、おもいつかれ、それに対して、数多の例証が時系列にしたがって列挙せられ、当該国
がその価値を実現しつつけたことが証明せられる。ナショナリズムが伝統にしたいのは、形式的
には、抽象化せられた価値においてであるが、内実は、歴史を再読するその作業においてである。
歴史は目的論的に再構成せられるのである。

それゆえ、「神明」の加護・「神孫」の皇統の意味するところも、また、千差万別である。たと
えば、後者に十全の「君徳」をよみこめば、伝統は、あるとき革命の標語となる。否定の対象は、
ただ〈大国〉にのみとどまりえぬ。

「小国ながら」の逆接が対照的価値をみちびいたに対して、「小国ゆえに」の順接は〈大国〉価
値への異議を導出する。⁽³¹⁾対照的価値と日本との密着の進行が、価値の顛倒をひきおこすのである。

註(26) 流布本、有明堂文庫、17～18頁。

(27) 統群書類従第18輯上、53頁。

(28) 日本古典文学大系、第32巻、172頁。

(29) 日本思想大系、第20巻、195頁。

(30) 論理的には、もとより、優劣の決定に、なんらかの「普遍的原理」への引照は不可欠である。たとえば、「まことの道は、
天地の間にわたりて、何れの国までも、同じくたゞ一すぢなり。然るに此道、ひとり皇國にのみ正しく伝はりて、外国
にはみな、上古より既にその伝来を失へり」(本居宣長)。「玉くしげ」、日本古典文学大系、第97巻、323頁。

(31) 論理的には、空想への逃避の類型に対応して、〈大〉の貶価、すなわち、「大国ゆえに」とする〈大国〉否定があり
うる。安藤昌益の、「漢土は聖人起り、大国にして勝てて貴びて私の制法を立て、己れ上に立ちて一般の転下を盗む故
に、其の下に兵乱の起り、他も又、転下を奪い、之れを盗む。故に乱々として止むこと無し」は、これにあたるか。な
お、昌益は、日本を「僅かの小嶋」という。『統道真伝』、岩波文庫下巻、52、53頁。

まず、<小国>は、中国流には「東夷の小国」(熊沢蕃山⁽³²⁾)である。その価値化は、周辺の価値化にはかならぬ。荻生徂徠が、「迺ち東夷の人を以て、聖人の道を遺されし経に得たり」というとき、依然「聖人の道」には依拠するものの、「聖人の邦」(33)の孔子歿後の墮落に、かかる「中華」(34)から自由な周辺の自分が、その「普遍的原理」の正統的理解者として対置せられる。ここにおいては、「道」への絶対的帰依が、実は「中華」の時間的限定によって担保せられる結果、「孔子歿してより二千年に垂んなんと」(33)する現実の<大国>は、「東夷」の下風にたたねばならぬこととなる。(35)

つぎに、仏典流の「粟散辺土」も、また、文字どおり周辺の謂であるが、「五天竺図」・「南瞻部州万国掌菓之図」のごとき世界図が、それを視覚的に定位し、天竺・中国・日本の地理的關係をしめすとき、<小国>の価値化は異種の視点を獲得する。「此国ハ天竺ヨリモ震旦ヨリモ東北ノ大海ノ中ニアリ、別州ニシテ神明ノ皇統ヲ伝給ヘル国也」(神皇正統記⁽³⁶⁾)。卵型の「世界」からはなれて波間にただよう数箇の小島は、そのゆえに、「別州」とせられるのである。

おわりに、「小国ゆえに」は、一般に、<小>の価値化を期待する。そして、問題は反価値としての<小>に胚胎したのであるから、それは、<小>の寓意を解説するという形式をとらざるをえぬ。「小国なること、三国のはじめなる証拠なり。万物みな始は小きもの也といふ」(熊沢蕃山⁽³⁷⁾)。

価値の顛倒が、<大小>軸を<小大>軸によっておきかえるものであったに対し、「忽て物の尊卑・美悪は、その形の大小によるものにあら」(本居宣長⁽³⁸⁾)ずと、その判断の基準自体を否定する方法もありうる。<小>の価値化と同様に、問題の発源点に疑いをいれるこの方法は、しかしながら、既製の概念装置を枠組として踏襲する前者に比し、より困難である。

註(32)『宇佐問答』、昭和15年版『蕃山全集』第5冊、292頁。

(33)「富春山人に与う」、『徂徠集』。日本思想大系第36巻解説(吉川幸次郎)716頁より引用。なお、佐藤誠三郎「幕末・明治初期における対外意識の諸類型」に、本解説に依拠した分析がある。下掲7~8頁。本稿のための資料検索に、以下の四論文が裨益した。本庄栄治郎「徳川時代の蝦夷開発及海外経略論」(本庄『近世の経済思想統篇』昭和13年、日本評論社)。内田秀雄「我が国土観の変遷」・「粟散片州論」(内田『日本の宗教的風土と国土観』昭和46年、大明堂)。佐藤上掲(佐藤・R・ディンクマン編『近代日本の対外態度』昭和49年、東京大学出版会)。

(34) <小国>は、徂徠によって、つぎのごとくに位置づけられた。「吾国ハ小国ニテ、シカモ不文ナル国ナレバ、異国ニ比スレバ、殊ノ外ニ治メヤスキ国也」。『太平策』、日本思想大系、第36巻、453頁。

(35) 現前する<大国>からその文明のみを剝離する操作は、その同時代性のゆえに、七世紀・十九世紀の日本にとり、至難であった。たとえば、聖徳太子の遺語が、その程を象徴する。「世間は虚り仮りにして、唯仏ノミ是真ソ」。『上宮聖徳法王帝説』、日本思想大系、第2巻、371頁。

(36) 日本古典文学大系、第87巻、45頁。ちなみに、特殊性の強調は、日本思想が異文明に対する局面において反復頻出する様式である。

(37) 『三輪物語』、昭和15年版『蕃山全集』第5冊、207頁。ちなみに、水野沢斎は、「万物はじめて生者は皆大ひなり」という。『養生弁』、日本衛生文庫、第3輯、280頁。なお、後年、「西洋」に対しても、<小>の寓意が以下のごとくによみとかれる。「およそ物は、自然の形体ありて存せざるはなし。而して神州はその首に居る、故に幅員甚しくは廣大ならざれども、その万方に君臨する所以のものは、未だ嘗て一たびも姓を易へ位を革めざればなり。西洋の諸蕃は、その股脛に当る、故に舶を奔らせ舩を走らせ、遠しとして至らざるはなきなり。而して海中の地、西夷、名づけて亜墨利加洲と曰ふものに至つては、すなはちその背後なり。故にその民は愚懸にして、なすところある能はず。これ皆自然の形体なり」(会沢正志斎)。『新論』、日本思想大系、第53巻、50頁。

(38) 『玉くしげ』、日本古典文学大系、第97巻、328頁。なお、『呵刈腹』には、「凡て物の尊卑美悪は、形の大小にのみよる物にあらず」。『本居宣長全集』第8巻、405頁。

それは、あくまでも「尊卑」には拘泥するのであるから、たとえば、美醜のごとき、〈大小〉以外のなんらかの基準を採用せねばならぬ。しかも、その対照的価値体系は、「小国ながら」のばあいとはことなり、表面上も多元的体系の共存を容認することはない、したがって、新基準の正統性をも同時に闡明せねばならぬ。そして、当然に、日本ならびに中国がそれに引照せられて作業は完結する。

基準が新基準であることによって、「文化の文明化」が必須となる。自他に対する新基準採用の勸奨は、それが文化内部に探求せられるかぎり、既製体系の援用であるゆえ、「哲学」の構築を要請せられぬ。のみならず、新基準への引照過程において、理想と現実との混同が生じやすい。文化的価値の存在は、その価値に対応する事実の遍在を保障するものではないにもかかわらず、すでに実現せられたものとして承認せられる傾向を有するのである。

かくて、客観的に認識せられる価値組織としての文化中の一列が、「日本文明の粹」として主観的に価値化せられる。その際、観察者の「理想主義的」個性によって、あるいは、状況の「わるさ」によって、当該価値の具象化としての社会を同時代にみるのが不可能であれば、古代がそれに擬せられることが通例である。歴史は、「文明」からの逸脱の過程として構成せられ、その原因が中国との文化接触にもとめられれば、中国貶価は、新基準への引照のみにとどまらぬこととなる。⁽³⁹⁾

価値顛倒と同様の操作を、価値と実体との関係についておこなえば、中国の〈小国〉化、ならびに、日本の〈大国〉化がみちびかれる。

まず、日本を「別州」とする地理的知識において、「震旦ヒロシト云ヘドモ五天ニナラブレパー⁽⁴⁰⁾辺ノ小国ナリ」(神皇正統記)。〈大国〉中国は、天竺を眼界にいれることにより、相対化せられる。それは、〈小国〉性において、日本とえらぶところがない。⁽⁴¹⁾

しかしながら、「況、尸那・日本等、国もへだて音もかはれり。人の根鈍なり、寿命も日あさし、⁽⁴²⁾貪・瞋・痴も倍増せり」(日蓮)と、「この国小国にて人の心ばせ愚かな」⁽⁴³⁾(鴨長明)り。「この日本国は、海外の遠方なり、人のこゝろ至愚なり」⁽⁴⁴⁾(道元)の延長線上に中国を位置せしめるかぎり、中国

註 (39) 以下のごとき認識は、国学系統の思想家に共通する。「日本は此の私欲の邪法の流れ入るを貴び用いて、先立の本道無し。故に其の下に守屋の如き兵乱起り、国家の患と為る」(安藤昌益)。「入唐の益は交易のみなり。仏教、儒道のさかしきを習(ひ)ては、篋位弒逆の事やまず、百年干戈の休む時なし」(上田秋成)。「統道真伝」、岩波文庫下巻、52～53頁。『胆大小心録』、日本古典文学大系、第56巻、360頁。

(40) 日本古典文学大系、第87巻、45頁。なお、『耀天記』に、「是ヨリ東ニ一ノ小国アリ。震旦国トナツク」。また、道元も、「東地辺国」をもって中国を指示することがある。ただし、『正法眼蔵随聞記』には、「大国ニハヨキ人モ出来ルナリ」と、中国の僧をたたえるばあいもある。統群書類従第2輯下、604頁。『正法眼蔵』、日本古典文学大系、第81巻、223頁。同巻、320頁。

(41) ちなみに、本多利明も、「支那と日本とは、亜細亞大洲の内東端の所在にして殊に小国なり」。『交易論』、日本思想大系、第44巻、167頁。

(42) 『開目抄』、日本古典文学大系、第82巻、350頁。

(43) 『無名抄』、日本古典文学大系、第65巻、84頁。

(44) 『正法眼蔵』、日本古典文学大系、第81巻、276頁。

の<小国>化は成功をおさめるものの、満足は否定的にもたらされるのみである。

したがって、また、日本の理想的<大国>化が積極的に期待せられる。そして、国土の狭隘性がこえがたい事実であり、中国<小国>化の逆をゆく『書紀』流儀の相対的<大国>化が、たかだか、中国への接近を意味するのみであるとき、もとめられるものは、面積以外の計量可能な指標にほかならぬ。

「今の世界と号する者は、その周回三百六十度にして、万五千里に過ぐることなし。即ち日本東西の経度を以て之を較べ計るに、則ち三十二倍に余ることなし。然らば則ち、日本も亦[○]大国なり」（西川⁽⁴⁵⁾如見）。<大小>の決定を「経度」にゆだねることは、たしかに一箇の新見ではあったが、十七世紀末葉の世界知識においても、「亦」は必然であり、のみならず、それは、「極大」の存在をも示唆せずにはおかぬ。

自然地理学的所与が、日本<大国>化に有利な条件をしめしえぬとき、人文地理学的諸範疇が採用せられる。「皇国は古よりして、田地・人民の甚多く稠密なること、さらに異国には類なければ、此人数・物成を以て量るときは、甚大国にして、殊に豊饒・殷富・勇武・強盛なること、何れの国かはよく及ぶ者あらん」（本居宣長⁽⁴⁶⁾）。たとえば、人口の多寡は、歴史的に、国土の広狭よりもその自明化がおくれたことによって、また、生産のそれは、計量手法の多様性によって、ともに、恣意介入の余地を生ぜしめる。

さらに、人文地理学的諸範疇の、日本の理想的<大国>化にとっての根底的意義は、その可変性に存する。「現在」の「優劣」を的確に認識しうる冷静な観察者も、「未来」における「成長」をみこむことによって、熱烈な「愛国者」となりうるのである。

そして、実は、国土も「成長」する。すなわち、膨脹であり、事実の世界における<大国>化であり、<小国>意識克服のもっとも直截的な方法にほかならぬ。

「欧羅巴隆の国々は、本国は小国なるもあれど、属国多くある国を指て大国と云」（本多利明⁽⁴⁷⁾）と
しられた時代においては、たとえば、呂宋、「南、ミンダナオ迄も併〔せ〕たらば日本よりも広く」（帆足万里⁽⁴⁸⁾）から、「東洋に大日本島、西洋にエケレス島⁽⁴⁹⁾と、天下の大世界に二箇の大富国、大剛国とならん」（本多利明⁽⁵⁰⁾）をへて、「亜細亜ヲ併せ、欧羅巴ヲ吞ミ、五洲ニ一帝タランコト抑難キ非ラ⁽⁵¹⁾」

註 (45) 『日本水土考』、岩波文庫、24～25頁。

(46) 『玉くしげ』、日本古典文学大系、第97巻、329頁。なお、『呵刈霞』には、「皇国は彼に比すれば、境域はこよなく小狭なれ共、田地甚多くして人民の多きこと、彼国のよく及ぶ所にあらず」。『本居宣長全集』第8巻、406頁。

(47) 『西域物語』、日本思想大系、第44巻、132頁。

(48) 『東潜夫論』、岩波文庫、82頁。

(49) 特に、理想化一般の対象としては、オランダが先行する。たとえば、「彼国にては一絲無益なる事をせぬなり」（三浦梅園）。なお、「日本の如く四方を離れて嶋国なり」（安藤昌益）のごとく、共通項探求の努力も存する。『帰山録草稿』、岩波文庫『三浦梅園集』、112頁。『統道真伝』、岩波文庫下巻、51頁。

(50) 『西域物語』、日本思想大系、第44巻、138頁。

ン」(土生熊五郎⁽⁵¹⁾)までの幅において、構想が展開せられる。

まず、膨脹の蓋然性乃至必然性が、モデルとのあいだの共通項の発見によって提示せられる。そのもっとも簡明な形式は、「土地の幅員凡日本国程」(本多利明⁽⁴⁷⁾)なる事実への着目であって、〈小国〉、とりわけて、「小島」への共感がいちじるしい。そして、あらがいがたい「後進性」のまえにおいては、「潜在力」の評価も、また、必要となる。なお、斯様な「合理的」努力によってはおおいがたい部分を、通常、「使命」が補完する。

つぎに、「内地之御処置、此迄之旧套にては不_レ相済_ニ」(橋本左内⁽⁵²⁾)。膨脹は、それが政策であるかぎり、内政との組みあわせを構成せねばならぬ。「今日之患不_レ在_ニ外寇_ニ而在_ニ内乱_ニ」(野本白巖)とする論者が、「内乱必待_ニ外寇_ニ而後発_ス」としつつ、ついには、「如_ニ亜墨利加西岸_ニ亦可_ニ進取_ニ也」⁽⁵³⁾と膨脹を構想するとき、その連続性が裏から証せられる。そして、「潜在力」の組織化は、それを「潜在」するにまかせた「旧套」の制度の容易に実現しがたいところである。「使命」の強調も、膨脹過程全般をおおいつくせぬゆえ、一般に、膨脹も、内政「革新」を一義的課題とせざるをえぬ。

おわりに、膨脹は、「今急に武備を修め」(吉田松陰⁽⁵⁴⁾)とせられる「今」の事業である。消極的には、滅尽する「伝統」・収奪せられる「国益」の傾向性を阻止し、「使命」を達成することが、「今」であれば、なお、可能であり⁽⁵⁵⁾、積極的には、「伝統」の高揚・「国益」の増進・「使命」の達成のため⁽⁵⁶⁾に、「今」こそ千載一遇の好機であると主張せられる。そして、それを、「脅威」の確認が支持する。それは、一方において、もとより、「外寇」としてとらえられるが、他方、常になんらかの「間隙」も発見せられる。その双方を通路として、「今」の適応は実現せられるのである。

膨脹は、「先ヅ支那国ヲ取ベキノ方略ヲ詳カニス」(佐藤信淵⁽⁵⁷⁾)る構想において、〈小国〉意識との関係をもっとも端的に表明するが、北方・南方の経略論をもふくめて、歴史的には、「豊国公の朝鮮を攻め給ひし」(帆足万里⁽⁴⁸⁾)より以後、それは、ながらく空想にとどまるところであった。構想の内容に即することをせず、そのはたした機能にのみ注目するならば、それも、また、逃避の場を用意することとなったのである。

そして、斯様な機能は、特に文芸⁽⁵⁸⁾、なかんずく、演劇において顕著である。そこにおいては、し

註 (51) 『慶不恤緯』、日本経済叢書、第12巻、211頁。

(52) 村田氏寿宛(安政4年11月28日)、日本思想大系、第55巻、569頁。

(53) 『海防論』、小野精一編『野本白岩遺芳』、203、216頁。

(54) 『幽囚録』、昭和13年版『吉田松陰全集』第1巻、350頁。

(55) 斯様な文脈において、柳田国男の数多の著作の序文を想起せよ。それらは、ながきにわたってしるされた。

(56) たとえば、「只今は大徳と聞しエイカテリナと云女帝も逝去と聞ば、当時は蝦夷諸島及カムサスカの土地を取戻べき時節ならんか」(本多利明)、『西域物語』、日本思想大系、第44巻、161頁。

(57) 『混同秘策』、日本思想大系、第45巻、428頁。

(58) 『今昔物語』にみえる、「大國ノ天狗=在シケレバ、小國ノ人ヲバ、心=任テ獲シ給ヒテムト」期待せられて、比叡の山をくだる余慶律師・深禅権僧正・山へのぼる慈恵大僧正につきつぎにたちむかい、相手の力量に応じたやぶれ方をする智羅永寿の話は、構成がよくとどいている。日本古典文学大系、第25巻、145~149頁。

ばしば、たとえば、「速やかに浦の波の、立ち帰り給へ楽天」(謡曲、白楽天)⁽⁵⁹⁾と唐の詩人を故国へおいやった住吉明神のごとき「擬人化」がおこなわれ、<小国>意識の補償を明快に、視覚的に達成せしめる。

「唐相撲」は、中国にわたって、かの地の皇帝につかえた日本の相撲取が、帰国の名残に主と相撲をとり、実質的に勝をおさめる狂言である。演戯としては「相撲第一」(大蔵虎寛本)⁽⁶¹⁾であるが、対照的価値の実現が、競技の勝敗という普遍性のたかい一点にかけられることによつて、そこには、中国に対する日本の優越が、きわめて有効にうつしだされる。⁽⁶²⁾

そして、狂言は、逆の主従の組みあわせも用意する。すなわち、「唐人子宝」に、主は日本人、かかえられる側が中国人通辞である。その通辞をむかえにわたりきたった子供に免じて、父親に暇があたえられるのであるが、評価は、かかって、「まことに和国にも親孝行の者多しと言へど、遙遙の波濤を凌ぎ尋ね来る志は、類少ない事」⁽⁶³⁾なる点にみいだされる。

<大国>中国によつて触発せられる<小国>意識中の煩悶とは対蹠的な、平等・普遍・共感の思想的営為も、また、確実に存在した。

明治七年の台湾出兵が、一切の空想への還流を阻止して、事実の世界における膨脹を実現する。⁽⁶⁴⁾⁽⁶⁵⁾特に、大久保利通が全権弁理大臣として清国に派遣せられてから、事態は、当然のことながら、日清紛紜の様相を明瞭にし、それとともに、国民は、「或ハカラ以シ或ハ資財ヲ以テシ或ハ精神ヲ以テス」(信飛新聞、明治7年10月18日)⁽⁶⁶⁾ることとなる。すなわち、兵役志願・軍資献納・神祇祈願である。⁽⁶⁷⁾⁽⁶⁸⁾

註 (59) 日本古典文学大系、第41巻、308頁。

(60) 「天正狂言本」には、主従関係がない。日本古典全書『狂言集』下、253頁。

(61) 「唐相撲」、岩波文庫『能狂言』上、201頁。

(62) ちなみに、つぎのごとき立言もある。「そも本朝と申は小国なりとは申せとも知恵第一の国也」(幸若舞、たいしよくわむ)。なお、昔話の「仁王とどっこい」において、日本一の力もちの仁王は、八幡の加護と智慧のはたらきによつて、かろうじて唐のどっこいの追撃をのがれる。『幸若舞曲集』本文篇、30頁。岩波文庫『桃太郎・舌きり雀・花さか爺』、231～233頁。

(63) 日本古典全書『狂言集』下、195頁。

(64) たとえば、10月12日刊行の『衆報』には、「敢テ蟻臂ヲ振テ大国ニ向カヒ烏合ノ衆ヲ集メテ漫ニ騷張ヲ姿ニシ我ガ版図ヲ犯シ我ガ辺民ヲ虐シ遂ニ今日ノ事アリ」とあり、また、当時の駐日英国大使は、その11月16日附 D. Brooke Robertson 宛書翰に、「I certainly did not expect to find China willing to pay for being invaded.」とした。『東京日々新聞』明治7年10月28日。F. V. Dickins and S. Lane-Poole, *The Life of Sir Harry Parkes*, Macmillan, 1894, vol. 2, p. 194. なお、以下、明治七年刊行の新聞については、「明治7年」を省略して註記する。

(65) この出兵の政治史的要因は、『横浜毎日新聞』9月14日に、「民選議院の建白」の「余毒は今日に至りて尤も世上に流布し遂に外征に迄も伝染したるか」とせられるとおりである。ちなみに、論者「猫尾道人」は、同紙11月20日に、福地源一郎の「別号といふ世説」ありという。

(66) 複刊版による。なお、『朝野新聞』・『信飛新聞』以外の同年の新聞は、マイクロ・フィルムによる。

(67) 新聞には、また、身体へ漆をぬって徴兵のがれをはかった例なども報ぜられている。『信飛新聞』10月18日、『横浜毎日新聞』11月2日。

(68) ほかに、「軍靴千足献納」などもあった。『郵便報知新聞』9月18日。

日本〈小国〉意識の防衛機制

そして、その熱狂は、⁽⁶⁹⁾「今ニシテ大挙清ヲ討チ彼ヲシテ我版圖ニ入ラスメハ皇威赫々我ニ於テ五洲敵ナキノミ」(日新真事誌、8月3日)なる期待の成型にはかならぬ。⁽⁷⁰⁾

しかしながら、台湾に関して、終始一貫、「敢テ土ヲ貪ルニ非サ」⁽⁷¹⁾ることを強調した大久保の交渉は、銀両の獲得をもって、その結局をみる。膨脹は否定せられるのである。⁽⁷²⁾

しかも、なお、国民は、その大久保の帰国を、横浜・東京においてのみならず、京都において⁽⁷³⁾も、毎戸日章の旗をかかげて歓迎した。ことに、横浜着港は一日延引したにもかかわらず、その半時間きざみの祝賀の式次第は、間然するところがなかった。

そして、いま、横浜における祝辞二篇と帰京後の勅語とがのこされている。

兩國億万ノ生靈ヲ塗炭ニ陥レザル而已ナラズ又貿易殷盛ヲ開クノ基礎ニシテ天下万民ノ大幸福ト云ハザルベカラス (高島嘉右衛門)⁽⁷⁴⁾

若し夫れ一旦兵を構し歲月を弥るに及てや兩國鷸蚌の弊或は垂涎の外邦をして其志を逞ふせしむるに至らん (名取善十郎・新海吉哉)⁽⁷⁵⁾

汝能ク朕カ旨ヲ体シ反覆弁論遂ニ能ク國權ヲ全フシ交誼ヲ保存セシム (勅語)⁽⁷⁶⁾

横浜市民総代の富商には国際経済面への配慮によって、また、山梨県民総代の区長兩名には国際⁽⁷⁷⁾

註(69) ただし、国民には、階層の如何をとわず、「確切ナル情実ヲシルコトナ」き状態に対するいらだちがあった。華族は、「願クハ征台ノ始ヨリ今日支那政府トノ応答ニ至ルノ事状ヲ詳ニ垂示シ以テ其議ヲ尽スヲ得セシメ賜ハントヲ」と「建言」し、また、「小田南区会議概則」第八条には、「一般人民へ絶へて御下問御布告等なし恐れ多くも広く會議を興し万機公論に決す可しとの御誓文に背けり」とせられた。『日新真事誌』10月14日。『新聞雑誌』8月24日。『郵便報知新聞』10月15日。なお、たとえば、上の華族の「建言」は、『横浜毎日新聞』8月28日にも掲載せられたが、斯様なばあい、以下、一紙をかかげるにとどめる。

(70) 新聞にみるかぎり、「皇威」をいかなる勝利によって「赫々」たらしめるかという「計画」は、きわめてすくない。なお、中国との戦争を、伝統的語彙にしたがって、「晴レノ戦」と規定したものがある。『東京日々新聞』11月22日。

(71) 『使清弁理始末』、明治文化全集、第11巻、116頁。

(72) 「千里隔絶ノ地兵士ノ末々ニ至リテハ意外ノ艱難ヲ生シ候モ難凶」と、大久保も、撤兵について不安をいだいた。明治7年10月30日附黒田清隆宛、『大久保利通文書』六、156頁。

(73) 『朝野新聞』11月30日。

(74) 『読売新聞』12月18日。

(75) 註(14)にみられるとおり、もとより、いわば、膨脹気分は残存したが、また、当時、一般に、米価騰貴気配と横浜の不景気が報ぜられていた。たとえば、『東京日々新聞』2月14日・6月24日・9月29日・11月12日、『郵便報知新聞』8月9日。なお、大久保は、特に横浜における歓迎を、「誠ニ意外ノ有様」とした。明治7年11月27日、『大久保利通日記』下巻、353頁。ただし、東京の歓迎ぶりを、「只々表向ノ飾リノミ」とする非難もあった。『新聞雑誌』11月28日。

(76) 「茶生糸蚕糸煙草蠟燭漆器陶器を除く(一字不明)外乾魚乾菜菓種食物の類は大抵支那に向て之を輸出す而して其売買は支那商人の手になるもの十に八九」(猫尾道人)。『郵便報知新聞』9月4日。なお、政府は、「安堵シテ營業シ決テ動搖スルコトナカレ」との「告諭」を、九月二十九日、「諸港寄留ノ支那人」にむけて発表した。『横浜毎日新聞』10月2日。

(77) 『横浜毎日新聞』11月27日。

(78) 『横浜毎日新聞』11月11日にも、「鷸蚌ノ悔」の語がある。

(79) 『甲府新聞』11月26日、『横浜毎日新聞』11月27日・30日。

(80) 『大久保利通文書』六、206頁。なお、日本は、海軍力においてややまさるのみであったといわれる。田保橋潔『明治外交史』(岩波講座「日本歴史」、昭和9年)24~25頁。

(81) 『日新真事誌』11月29日は、「近國ノ諸國ニ於テ此ノ如キ者有ルヲ聞カス」、また、新橋においても、「惟見物ノ者雲集雜沓スルノミニテ曾テ農商輩一人ノ礼服ヲ着テ欣々然トシテ此盛事ヲ体認シテ迎拜シ恭ク祝賀ヲ呈スル者有ルヲ見ス」と歎じた。

政治的関心によって、しかしながら、総じて、存在をその深部においていかしめるものとしての文明の次元において、中国への「ちかさ」が看取せられるであろう。大久保自身、條款調印前日附の書翰に、金額の五分の四返却を提案して、「我国亜細亜ノ一島ニシテ文明各国ノ未為サムル処ヲ為シ近清国ノ款心ヲ取り遠ク欧米ノ意表ニ出テハ我国ノ盛名赫々トシテ輝ヘシ⁽⁸²⁾」とした。そこに政治的色彩の加重はみられるにしても、あたかも、六年まえ、「和漢西洋之學術折衷し不拔之/皇道揆今稽古其基本ヲ闡明する之豪傑出る事有て始て/王政一新之根軸ハ相立候事⁽⁸³⁾」とした、その文明の三極構造は依然彼のものであった。

大久保等に「横浜ニテ下賜候御祝酒」が、サンパン・鴨のシチウ・カヘー等からなる献立であったこと⁽⁸⁴⁾に象徴せられるごとく、時代は、すでに、西洋舶来を正統とした。そして、「其異ナル所ハ漸次ニ之ヲ改革シテ世界万国ノ是トシ公トスル道理ニ合スルニ至ルヲ要ス可」(朝野新聞9月24日)きであるとき、「日本<小国>意識の防衛機制」の精華が、あらたなる対象において発見せられる。

「事実としての文明開化」の進行によって、また、それとともに、「普遍的原理」の体现者が同時代の西洋とせられることによって、その追認が歴史を規定してゆく。しかしながら、もし、ふるくは「唐人子宝」の伝統を継承し、あたらししくは万延元年の西洋体験者玉虫左太夫の設問をみずからのものとする、普遍的原理創造の機会がのこされていたとするならば、類型としての膨脹を提供した明治七年は、また、そのかなりおわりの部分にも属するであろう。

ともあれ、この年、中山みきはつぎのようにうたって、日本<小国>意識と、その対象の転轍と⁽⁸⁵⁾重量とをしめしていた。⁽⁸⁶⁾

いままでハ ⁽⁸⁷⁾ からのがにほんを まゝにした
神のざんねん なんとしよやら

註(82) 黒田清隆宛別啓、『大久保利通文書』六、160頁。

(83) 明治元年12月25日附岩倉具視宛、『大久保利通文書』二、494頁。なお、序段にかかげた主題とならぶ、日本思想史のいま一方の主題は秩序意識であり、その両者は密接に連関する。

(84) 『大久保利通文書』六、215~216頁。

(85) 当日の後刻、すなわち、高島等の祝辞と大久保の答辞がのべられてのち、ふたたび酒食が供せられた。「酒饌を出し饗応がありましたのみな日本料理で有りましたといふ」。意外の感をするべきである。『読売新聞』11月30日。

(86) 「外国に比ふればも粟粒の国にも人のあらさらめやは。『横浜毎日新聞』10月31日。ちなみに、中江兆民も、明治二十一年、「我日本人にして、我邦を指して土地小に、人民寡しと称して、嘆息失望する者」に対して、「大国恐る可らず」と激励した。明治文学全集、第13巻、320~321頁。

(87) 中国を<大国>とする議論は、たとえば、「支那は世界中凶抜けの大国なれとも唯々己惚自慢の油断が付込所。『郵便報知新聞』10月9日。

(88) 「近来ノ御布告文多ク新奇ノ漢語ヲ用ヒ、また、「商店ノ丁稚ノ時様ニ注意シ漢語ヲ用ヒザル無ク」という有様であったゆえ、明治七年七月、「方今文華日に盛にして三尺の童も漢語を以て通信す」という歌い文句によって、『公私用文』二冊が刊行せられた。『東京日々新聞』2月7日・11月7日、『郵便報知新聞』8月2日。ただし、中国語に関しては、「甚可哀哉今江湖ニ支那語ヲ学ヒシモノム多クアラサルコトヲ」という状態であった。『日新真事誌』3月18日。

(89) 中山の「せかい」は、「にほん」と「からてんぢく」とから成立する。そして、中山をとりまく社会経済的状況を考慮するとき、日本に対立する「から」は、分析的には、西欧資本主義列強である。「おふでさき」、日本思想大系、第67巻、248頁。

日本〈小国〉意識の防衛機制

このさきハにほんがからをまゝにする
みな一れつハしよちしていよ
をなじきのねへとゑだとの事ならバ
ゑたハをれくるねハさかいでる
いまゝでわからハゑらいとゆうたれど
これからさきハをれるはかりや
にほんみよちいさいよふにをもたれど
ねがあらハればをそれいるぞや
このちからにんけんハさとをもハれん
神のちからやこれハかなわん⁽⁹⁰⁾⁽⁹¹⁾

註(90)「おふでさき」、日本思想大系、第67巻、202～203頁。なお、つねに「たすけせきこむ」ことによって、「今」が、膨脹にかぎらず、およそ使命一般になじむことをしめす中山には、また、つぎのごとき歌もある。「からのちをにほんぢいにしたならば／これまつだいのいきどふりなり」。「みかぐらうた」、日本思想大系、第67巻、180頁。「おふでさき」、同巻、213頁。

(91) 本稿の主題に関して、当代の余裕ある思索者は、内省をもっていう。「先年いったオーストラリアでは広大な土地をみるたびに、小さなお座敷でふぐを食べることばかり考えていた」(井上好子)。「一杯のひれ酒から」、週刊文春編『美女がすすめる味の店』(昭和54年、文芸春秋)64頁。